

No.3004

ポル・ポト政権期後の社会主義体制下カンボジアにおける教育再建の歴史的意義
—地方都市に生きた教師の人生・語りにみる認識と実践から—

名古屋大学大学院教育発達科学研究科

博士後期課程

千田沙也加

本研究は、ポル・ポト政権期後の国家の復興・再建期であり、社会主義国家であったカンボジア人民共和国期（1979-1989年）の教育史を再構築する試みである。特に、政策史研究だけでは明らかにできない、教育再建の歴史的意義を、地方都市に生きた教師たち個々人の人生と語りから明らかにすることを目的として、2018-2019年度の2年間の研究活動を行ってきた。

1年目には、カンボジアにおける2度のフィールドワークを実施した。その結果、カリキュラムでは、クメール語と「労働」を最も重要な教科として位置づけていることを明らかにした。クメール語では反ポル・ポト思想の形成が重要な教育目標とされ、「労働」については、社会主義の理念に基づいた、主要な教科と位置づけられていた。しかし、聞き取り調査の結果から、教師たちがクメール語にポル・ポト政権期以前との連続性を見出していたことと、「労働」に無関心であったことが明らかとなった。

2年目には、教師のライフヒストリーの補完を目的としたカンボジアにおけるフィールドワークを実施した。聞き取りに基づき、教師24名のライフヒストリーを作成した。彼／彼女らの認識と実践によると、社会主義の理念に基づく教育再建には無関心であり、教師たち自身の学習経験を応用した教育再建、すなわち、ポル・ポト政権期以前の教育を専有した教育実践を行っていたことが明らかとなった。高学歴を含む多様な背景の者が、緊急の対応で教師になり、その全ての教師を含みこむ緩やかな共同体意識が教師たちの間にみられ、ポル・ポト政権期以前の知識や技術を分け合う相互扶助を行っていた。さらに、政権が教師を募集する際に掲げていた「できる人ができない人を教える」というスローガン自体が、個々の教師たちの過去の学習経験を暗に肯定したという矛盾が明らかになった。

以上、本研究では、個々の教師たちの認識と実践からこれまで明らかにされてこなかった過去と連続した教育再建の展開や、多様な教師による相互扶助の実践など歴史的な役割を明らかにすることができた。